

ガラスペンの
煌めきと輝きを
平和へのメッセー
ジに
こめて。



日本唯一といわれる硬質ガラスペンの職人・菅清風さんは当年92歳。1200度のバーナーの前でガラスを溶かし、絞り込んでペンを作る姿はかくしゃくたるもの

硬質ガラスペン

菅清風さん

コップから窓ガラスにいたるまでガラスは馴染みの深い素材ですが、そのガラスで宝石のように美しいペンを作る匠がいます。当年九十二歳の菅清風さん。ガラス職人として六十年の経験を重ね、ポツペンと呼ばれるガラスの玩具や砂時計、ネオンサインなどを製作する傍ら硬質ガラスペンを製作。硬質ガラスのペン作りは日本唯一という稀少性と何よりその美しさに魅了されるファンが増えています。京都・北白川の清風さんの工房「炎」におじゃましました。

明治に生まれたガラスペン

紀元前四千年も前からガラスの工芸品はあったといわれています。エジプトやペルシャでビーズのようなものが作られたのが始まりで、日本にも正倉院御物の中に美しいガラスの碗や首飾りなどの装飾品、双六などが保存されています。日本人とガラスの歴史は千四百年もの歴史があるのです。

我が国でガラス製造が始まったのは弥生時代後期といわれ、飛鳥時代から奈良時代には朝廷の保護の下、「典鑄司」、つまりガラス職人たちによって勾玉やとんぼ



ペンというより宝石のようなガラスペン。平和に貢献した人や清風さんが感動した人などに贈り続けている。結婚式でのサインに求めるカップルもあるとか

玉などの装飾品のほかに仏具や器などが製造されていたといえます。しかし、平安時代にガラスの製造が廃止され、「玻璃」とか「瑠璃」と呼ばれるガラス工芸品は主に大陸からの渡来品となりました。

その後、十六世紀後半から十七世紀にかけて、ポルトガル人が長崎にガラス工場を造ったり、ガラス加工法を日本人に伝授するオランダや中国のガラス職人が登場したり、海外に渡って眼鏡の製法を習得した商人が出現するなど、日本のガラス工芸は再び興隆していきます。そして幕末には薩摩切子や江戸切子など、優れた日本のガラス工芸が育っていきます。

そんな日本のガラス工芸の伝統をつないでガラスのペンが誕生するのは明治



ネオンサインも炎によって自在に加工。ガラス細工はホットワークとコールドワークに大別されるが、清風さんの技術はホットワーク



一度インクを補充するとハガキ一枚くらいなら一気に書ける機能性も人気。毛細管現象によって、インクの垂れなどもなく、書き心地もスムーズで、角度を変えると太字と細字を使い分けられる



三十五年(1902)。江戸の風鈴職人・佐々木定次郎が考案したガラス製のペン先です。筆の穂先のようにペン先に幾筋もの溝を入れ、そこにインクを補充するしくみで、毛細管現象の原理でインクが垂れすぎず、長く書き続けられるという機能的な筆記用具が生まれました。ただ

し、この時代にはまだペン先だけがガラスで、軸は竹製であったそうです。「当時は一週間ほどで使い捨てられる金属製のペン先しかなかった時代ですから、摩耗しないガラスのペン先は画期的な商品だったと思いますよ。しかも、金属製のものと違い、インクだけでなく墨汁を

使うこともでき、あらゆる方向にペン先が走るのので大いに普及したそうです。その佐々木定次郎の技をつなぐのが東京の佐瀬勇というガラスペンの第一人者です。私は佐瀬さんが素材とする軟質ガラスではなく、加工のしにくい硬質ガラスを素材にペン先から軸まで作りますから、硬質ガラスペンの職人は日本で私しかない」と清風氏はちよつと得意気です。

人がしていない仕事をした

大正九年生まれ、今年九十二歳の清風さんはまだ現役の職人です。工房での作業もペンを買いにくる客の対応も美術大学を卒業してこの道に入った弟子一人と清風さんの二人だけでこなします。

青年時代は太平洋戦争真っ只中。当時、米英からも「ゼロファイター」と恐れられた海軍航空隊の零戦部隊の兵隊として文字通り太平洋戦争の前線で戦っていた清風さんですが、

「終戦間近にアメリカの戦闘機、グラマンの爆撃に遭うて、ほとほと戦いがいやになったんです。戦争だけでなく、戦争につながる縦社会そのものも、会社や家庭で起こる小さな喧嘩など、あらゆる戦いがね……。だから人に会うのはもちろん、神も仏も信じられなくなっていた。そこで一人でできる仕事としてガラス工芸の師匠について職人の道を選んだのです。最初からペンを作ったわけではあり

ません。ネオンサインとか砂時計とかポツペンとか……。ただし、同じやるなら人のしていない仕事をしてやろうと思っていました」と、辛い思い出と共に仕事への姿勢も語ってくれます。清風の名は師である清流がつけてくれた号だそうです。

ところで、ガラスの加工法には熱によって柔らかくなった状態で形状を作る「ホットワーク」と熱が冷めて固体になった状態で加工する「コールドワーク」に大別されますが、清風さんの仕事は「ホットワーク」。つまり、熱でガラスを液状にして熱いうちに息を吹きかけて膨らませたり、曲げたり捻ったり伸ばしたりする技術です。ポツペンとは風船状のガラスの玩具で、細い管から息を吹きかけると風船状のガラスが膨張してポツペンと音がする



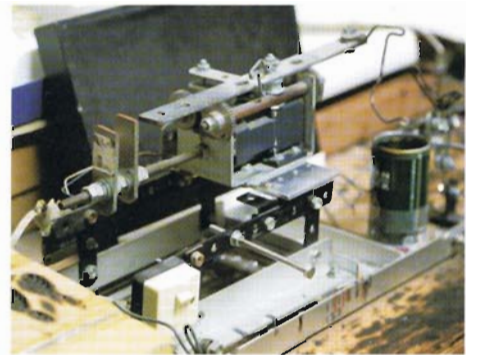
目下唯一の弟子と



菅清風 プロフィール
大正9年神戸生まれ。昭和18年徴兵により岩国航空隊に配属され、終戦を迎える。昭和47年ガラス職人を目指して修業。ネオンサイン、ポップペン、砂時計、ガラスペンなどのガラス工芸品を製作し、平成15年、ガラス工房「炎」を開設し、硬質ガラスペンを販売。平和に貢献した世界の人々に自作のペンを贈り続けている



清風さんが作ったガラスペンの数々。「賀茂の流れ」「白川」「津風」「大文字」など美しい京都の風景の名がつけられている



使い込まれた清風さんのガスパーナー。この前に座ると揮のごとき境地に入るとか

ことからの名稱。「びいどろを吹く女」という喜多川歌麿の絵の中でモデルの美人が吹いているもので、江戸時代からあったガラス玩具。清風さんはこのポップペンでも砂時計でも、人の真似のできないものを作るうと志しただけでなく、ガラスペンも作り始めたそうです。

「ペンは、この道に入ってからすぐからやり始めてはいましたが、人のしていないこと、真似のできないものと思うとなかなか納得のいく仕事ができず、試行錯誤の末、二十年ほど前から公に出してみようかなと思える作品ができるようになった」のだとか。

そのガラスペンは「白川」「雅」「清風」「極」「賀茂の流れ」など美しい銘がつけられ、デザインと色が京都の景色をイメージさせます。まるで宝石のようですが、角度を変えただけで太くも細くも文字を書き分けられ、インクの持ちもよいので機能的でもあり、まさに清風さんの工夫と苦勞の結晶です。たかがペン一つにこ

ことでのこだわりを見せる清風さんは、まことに人のできない仕事をする匠です。

平和を願う一人の職人として

清風さんは四年前、八十八歳になった頃からポップペンと砂時計を作るのをやめました。ガラスを膨張させるための息が続かなくなったからです。肺活量が求められる作業はお弟子さんの仕事となり、清風さんはもっぱらガラスペン作りに打ち込みます。

「朝は五時前に起きて、六時には工房で働いています。最近、少し耳が遠くなつたのと、歯医者に行くくらいで、きわめて健康。ガラスペンは千二百度のガスパーナーの炎の前で、一気に仕上げていく作業ですから緊張の連続ですが、仕事をしていることが私の薬」と。

その宝石のようなペンを時々人に贈るのが趣味のようになった清風さん。これまで贈った人はアメリカ大統領のオバマ氏や金大中氏など大物政治家や黒柳徹子氏や山中伸弥教授など話題の文化人や学者。清風さんがガラスペンを贈りたい人の基準は、

「平和のために貢献した人です。核廃絶の演説に感動したり、世界の子どもたちのためにがんばってるな」と感心したり、IPS細胞の研究で多くの人に希望を与えた人。つまり、私が高んらかの感動を覚えた人です」と。



これまで清風さんがガラスペンを贈った人々からのメッセージは清風さんのカンフル剤。世界の人物や作家、学者、芸能人などの手紙や感謝状が工房の一角に無造作に置かれている



ネオンサインの看板

工房内には、これまでに清風さんがガラスペンを贈った人々々々のお礼状や感謝状、内祝などが無造作に置かれています。それがいつでも目の届く所に置いておくこともまた、清風さんのカンフル剤なのかもしれません。